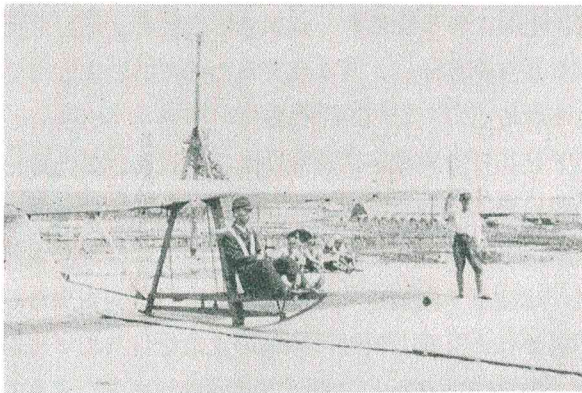


2 打出仮校舎時代 (1942~45年)

開校2年目が終わろうとする1942(昭和17)年3月12日に、芦屋中学校は岩園から打出の仮校舎に移転した。小学校から国民学校へと衣替えした打出の第五国民学校は、前年の4月28日に着工してこの春完成したばかりで、敷地面積4888.89坪(1万6133.3平方メートル)、総建坪964.7坪(3183.5平方メートル)の木造2階建校舎で、教室数は16であった。その日、生徒は総がかりで机や椅子を担ぎ、荷車を引いて岩園から打出へとうれしい引越を行ない、翌日の終業式も、19日からの入学試験もこの新校舎で行なわれた。打出の校舎は正式には第五国民学校のものとはいえ、芦屋市の好意で当分の間は芦屋中学校の専用校舎として使用できることになった。

1942(昭和17)年4月8日に、第3回目の入学式が行なわれ、4月18日には、全校生徒が芦屋のロッ



グライダーに乗る山本校長

クガーデンに登った。5月には3年生の渡辺周治君が朝日新聞の航空論文に入選し、グライダー「駒鳥号」が芦屋中学校に贈られ、滑空班を中心に全校的な滑空熱が盛り上がり、本校は翌年の3月にはグライダーを購入するにいたった。7月ころには、のちに父兄会をへて育友会へと発展する興学会が、田中龍男氏を初代会長として発足し、設備資金寄付申し込みが呼びかけられた。これは芦屋中学校がさまざまな事情で自前の本格的な校舎をもてず、内容の面でも何かと不足がちであったので、興学会を組織して主に施設・設備面において援助しようとの趣旨であった。興学会によって校旗がこの年に作られ、その後、各教科の備品・図書・時計・宿直用寝具・用紙・白墨・茶瓶・掃除用具などが学校に寄付され

た。

7月中・下旬には打出浜で水泳訓練が行なわれ、生徒はふんどし姿のまま海に向かった。山本校長は県庁に出かけ、そのころ貴重品であった砂糖を配給してもらい、水泳後の生徒に砂糖湯を飲ませたりした。10月には校内模型飛行機大会が行なわれた。そして11月3日に第1回運動会が、仮校舎の運動場が狭かったため、西宮球技場を借りて実施された。この時、運動会のすべての道具が、打出の学校から荷車で行きも帰りも運ばれた。翌年1月には早朝駆足が行われるなどして学校行事が出そろい、ようやく中学校生活の形が整ってきた。しかし、せっかく開かれた第1回運動会も、戦争の激化とともにこの年かぎりとなり、再開は終戦の翌年まで待たなければならなかった。

10月8日には木造校舎の増築が認可され、11月に起工式が行なわれた。戦争の影はしだいに中学校生活をおおい、1943(昭和18)年1月21日には「中学校令」が廃止され、中学校の修業年限を1年短縮して4年とする「中等学校令」が公布され、教科書が国定制とされた。同時に大学予科や高等学校の修業年限も3年から2年とされ、戦時色がいっそう深まった。さらに3月29日には「戦時学徒体育訓練実施要綱」が発表された。開校3年目が終る3月31日に、芦屋中学校の基礎を築いた山本校長が、離任して静岡県視学官へと転出した。

1943(昭和18)年4月1日に河野豊治氏が校長事務取扱を命ぜられ、8日に第4期生が入学した。15日に兵庫県教育主事阪部由松氏が第2代校長に就任した。阪部校長は、この後8年間にわたって本校校長を勤めることになる。5月に配属将校が着任し、農家への勤労奉仕もはじまり、6月は麦刈り・馬鈴薯掘り・苺畑の片付け、11月は稲刈りにと、生徒は主に西宮地区へ出かけることになった。6月25日に「学徒戦時動員体制確立要綱」が決定され、いよいよ中学校では勉強どころではなくなってきた。7月には3・4年生の一部が呉市における海洋訓練に参加し、7月中・下旬には恒例の水泳訓練が行なわれた。8月には1ヵ月間、健民修練といった戦時色の濃い行事が加わった。これはツベルクリン陽転者や

体の弱い者を作法室に宿泊させ、体操や遠足などで体を鍛えようというものであった。さらにこの月には、野沢スレート会社、川西航空機会社、芦屋川尻野砲陣地構築の勤労作業に生徒が動員された。やがて運動場には防空壕が掘られ、毎月8日には打出天神への戦勝祈願が行なわれ、毎月1回の六甲登山が実施されるようになった。

9月になると2名の生徒が予科練に入学し、本校よりはじめての軍関係の学校への進学となった。各学校には、予科練などへ出す生徒の割当があったらしく、校長以下職員はずいぶんつらい思いをした。ただ、これらの生徒が全員無事に復員したのは幸いなことであった。また9月30日には銃器庫が校内に設置された。この月には、17職種における男子の就業が禁止され、14才以上25才未満の未婚女子を勤労挺身隊として動員することが決定され、学徒体育競技会はいっさい廃止された。さらに10月には「教育に関する戦時非常措置方策」が決定され、理工科・教員養成系学生以外の徴兵猶予が停止された。そして12月になると学徒出陣がはじまり、さらに徴兵適齢が20才から1年引き下げられ、「都市疎開実施要綱」も発表された。戦局の急迫を反映して学校を取り巻く情勢が日に日に戦争一色に塗りつぶされる中で、芦屋中学校では、10月に文学博士有高巖氏を迎えて地理歴史の研究授業が行なわれ、12月23日には待望の木造2階建校舎14教室の増築が完成した。



打出仮校舎と生徒たち

1944（昭和19）年になると、いよいよ中学校では教練と学徒勤労動員に明け暮れる毎日となった。2月10日には、甲陽工業専門学校のグラウンドにおいて教練査閲をうけ、学級担任を小隊長として分列式を

行なった。学徒勤労動員は、農村や工場での人手不足を補うために強制的にすすめられたもので、すでに日中戦争期の1938（昭和13）年から、中学校以上で勤労奉仕として夏季休暇の前後に3～5日程度なされてきた。1941（昭和16）年8月の「学校報国団ノ体制確立方」によって学校報国団が組織され、本校でも「兵庫県立芦屋中学校報国団」が結成された。これ以後、学徒はこの勤労報国隊のもとで、軍需工場や農村への勤労奉仕に動員された。そして1943（昭和18）年6月の「学徒戦時動員体制確立要綱」により学徒勤労動員が本格化し、中学校3年生以上の生徒は1年に60日以内の勤労動員に出かけることになった。芦屋中学校でも、前述のように、西宮地区の農家や川西航空機会社などへの勤労動員が行なわれた。さらに1944（昭和19）年3月の「決戦非常措置ニ基ク学徒動員実施要綱」により、中等学校以上の生徒を全員工場に配置し、原則として通年実施することが決定され、7月には国民学校高等科・中学校低学年の動員も決定された。こうして国民学校尋常科生徒を除いて、日本中の学生・生徒は勤労動員や学徒出陣に根こそぎ動員され、学校教育の機能は事実上停止した。また8月には「女子挺身勤労令」が公布され、女子も原則として女子挺身隊に選定し動員された。

1944（昭和19）年4月8日に第5回目の入学式が行なわれ、5月になると3年生が三木陸軍飛行場の整地作業に動員され、さらに6月26日からは3年生以上の工場への勤労動員がはじまり、まもなく1・2年生もこれに加わった。11月30日付けの記録によると、1年生は日東アルミ・尼崎製鉄・大日本セルロイドに153名、2年生は久保田鉄工所・日本内燃機製作所・大阪機械製作所に200名、3年生は日本パイプ・三菱軽合金に237名、4年生は川西航空機会社に249名で、教師も計16名が付き添った。勤労動員は、生産第一と考える軍需管理官に対して、本校生徒たちの安全を守ろうとする教師たちの闘いでもあった。12月15日から日本内燃機製作所に動員された4年生に対して夜勤が命ぜられ、さらに22日には増築した東校舎の150坪が川西航空機会社の学校工場に指定された。このような勤労動員とともに、

8月の国民総武装の閣議決定にもとづいて、このころ本校では竹槍訓練が盛んに行なわれていた。また前年に続いてこの年も、健民修練が実施された。

7月にサイパン島が陥落して以来、長距離爆撃機B29による日本本土空襲が可能となり、11月には東京が初空襲された。1945（昭和20）年2月には空母機動部隊の艦載機による本土初空襲が加わり、3月には東京大空襲があった。さらに大阪・神戸への空襲もはじまり、いよいよ阪神地方も米軍機による空襲にさらされるようになった。この3月に「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、国民学校初等科を除き、4月から学校における授業を1年間停止することになった。

3月27日に、芦屋中学校にとって記念すべき第1回卒業証書授与式が行なわれた。「中等学校令」によって修業年限が短縮されたため、第1期生（5年生）109名、第2期生（4年生）208名が同時に卒業した。この日、打出仮校舎の校庭では、ゲートル着用の姿で終始起立のうちに式が挙行され、来賓や父兄の参加はなかった。2・3年生とその関係職員は勤労動員に出たままのため参加できず、動員されていない1年生が参列するだけで、「海ゆかば」を式歌とする淋しい卒業式であった。

1945（昭和20）年4月7日に第6回目の入学式が行なわれた。入学式半ばにおいて、校長の勅語奉読がはじまったとたん空襲警報が発令され、あわてて生徒を帰宅させて式は中止となり、9日に再度の入学式が行なわれた。このころには職員も応召するものが多く、入学式前日の職員会議の出席者は、43名の定員のうち半数の22名にすぎなかった。また4月から芦屋市では国民学校児童の学童疎開もはじまっていた。3月以来、空襲は日を追って激しくなり、川西航空機の学校工場がある芦屋中学校も攻撃の対象とされることが予想されていた。芦屋中学校周辺は民家が少なかったものの、南側には川崎の寮があり、本校を加えて一大軍需工場のおもむきがあったという。芦屋市は5月から8月にかけて4度空襲にあった。5月11日の空襲は、川西航空機甲南製作所（神戸市東灘区）を第一目標とする攻撃で、芦屋市に対する最初の空襲となった。6月4日に多分偵察

のためと思われるB29が1機飛来した。翌5日に南方海上からB29の編隊が来襲し、午前7時22分から8時47分にかけて神戸市東部・芦屋・西宮に焼夷弾を投下した。芦屋中学校にも多数の焼夷弾や小型爆弾が命中し、火災は東校舎から中央校舎へと広がった。宿直の職員やかけつけた学校防衛隊の生徒の奮闘により、燃えさかる校舎から学籍簿・身体検査書・会計書類をはじめ、備品や農具・机などが搬出されたが、必死の消火活動もおよばず30分にして校舎は全焼した。午前8時半に焼け跡の校庭で河野豊治教頭の訓話があり、午後には阪部校長が徒歩で市役所および県庁に状況報告に出かけ、また芦屋市長や勤労学徒受け入れ会社からの戦災見舞いがあった。本校の職員や生徒に、空襲による直接の被害はなかったものの、落下した不発焼夷弾によって卒業生と1年生の2名が重傷を負ってしまった。この日の夜は、職員と芦屋在住の2年生による警備不寝番が組織された。

こうして芦屋中学校は、3年3ヵ月にわたって仮住まいとはいえ、専用校舎として使用してきた打出の仮校舎を失った。そこで6月6日に、芦屋市から宮川国民学校（現本校）の本館東端の6教室を借用して仮校舎とすることになり、1年生の授業が再開された。しかし、宮川国民学校も8月5日深夜から6日未明にかけての阪神大空襲によって校舎が一部焼失し、使用可能なのは本館の1階と東端の教室のみとなった。269機のB29によるこの空襲は、芦屋市にも大きな被害をもたらして罹災者は人口の5割に達した。この6日には広島に、9日には長崎に原爆が投下され、15日に日本はついにポツダム宣言を受諾して降伏し、その翌日には学徒勤労動員が解除された。

8月21日に、戦後最初の職員会議が宮川国民学校の焼け残った3階東端の教室（のちの131号教室）で開かれ、翌日から二部授業が再開されることになった。しかし、9月になると宮川国民学校の児童も登校するので、芦屋中学校は4教室に限られ、とうてい全学年を収容することは不可能であった。そこで9月3日から打出の海技専門学校（現海技大学校）で、3・4年生の授業が開始された。阪部校長

は校舎の確保に奔走したが、芦屋市では学校校舎の8割が戦災で失われていたため思うにまかせなかった。ようやく10月3日に、武庫郡本山村から本山第一・第二国民学校（現本山第一・第二小学校）を借りることが決定した。